



「気象予報士ハンドブック」

日本気象予報士会 編
オーム社，2008年11月，
896頁，15000円（本体価格）
ISBN 978-4-274-20635-1

日本気象予報士会が初めて世に送り出す待望の本格的ハンドブックがオーム社から発刊されることになった。編集委員長は日本気象予報士会会長の酒井重典氏，そして編集幹事5名，編集委員9名，執筆者96名が本書の編集に参加している。まさに，日本気象予報士会が総力をあげて完成させた896頁におよぶ大作である。気象学に関するハンドブックは，これまでに何冊か発刊されているが，このハンドブックは，まさしく気象予報士の気象予報士による気象予報士のためのハンドブックである。

はじめに，気象予報士制度導入の背景から説明しよう。1992年3月，気象審議会は「社会の高度情報化に適合する気象サービスのありかたについて」の答申を行った。その主旨は，国民の多様なニーズに応え，総合的な気象サービスの提供を推進するため，局地天気予報については，民間気象業者の振興を図るというものであった。その条件として，気象庁の発表する防災情報との整合性を保ち，また情報の質が確保される必要があり，現象の予測を行う予測技術者の能力が重要となる。そのため，予測技術者の技能に関し，適切な資格制度を導入することが必要であるとして，ここに気象予報士制度が誕生した。その後，2008年12月31日現在で6841名（男性6015名，女性826名）の予報士が誕生している。

気象予報士の活動分野としては，ウェザーキャスター，防災活動アドバイザー，気象コンサルタント，気象知識の普及活動などがある。予報業務の許可事業者として，2008年10月現在59の事業者があり，民間気象会社，放送事業者，地方自治体，大学（岐阜大学），個人事業者などが含まれる。このような情報も表にまとめられている。

ハンドブックの章立ては以下の通りである。

- 第1編 日本の四季
- 第2編 暮らしと気象

- 第3編 基本的な気象学
- 第4編 観測
- 第5編 解析と実況監視
- 第6編 天気予報
- 第7編 防災と気象
- 第8編 ビジネスと気象
- 第9編 環境と気象
- 第10編 天気情報の報道とキャスター
- 第11編 気象知識の普及
- 第12編 気象関連情報の利用

各々の編で，はじめに総説があり，ハンドブック全体の中での各編の位置づけを明確にしている。また，気象予報士との関係という章があり，本書が他の書物と異なり，気象予報士のためのものである点を強調している。

例えば，第7編の「防災と気象」の中の防災活動における気象予報士の位置づけと役割の章では，「気象予報士は，気象庁が作成提供する気象情報その他を活用するなどして，民間に必要とされるきめ細かな気象情報を提供する立場にある。」と述べられ，さらに，「換言すれば，気象予報士は情報利用者の立場に一步も二歩も踏み込んだ位置にあって，利用者にとって使い勝手の良いきめ細やかな気象情報の作成提供に努め，そのことによって国家機関たる気象庁と国民との間の仲立ちをする立場にある。」と説明される。このことは，気象災害と関係する緊急時にあっては，気象予報士による正しい知識と的確な判断により，気象知識のない一般市民を誘導し，国民の生命と財産を守る立場におかれる場合もある，ということの意味している。

本書の導入は第1編の「日本の四季」と第2編の「暮らしと気象」であり，やさしく滑らかに気象の解説が始まる。第3編の「基本的な気象学」から6編の「天気予報」までは，気象予報士として知っておくべき気象学の基礎が簡潔にまとめられており，内容も学術的にしっかりとしたものとなっている。気象予報士の執筆者の多くは気象学会員でもあり，これらの編の内容は他のハンドブックにも見られるものであるが，的確に内容が更新されている。

第8編の「ビジネスと気象」から第10編の「天気情報の報道とキャスター」などは，気象予報士ハンドブックならではの斬新な切り口で解説されている。ウェザーマーチャンダイジングとは例えばスーパーの

商品の売れ行きに影響を与える気象要素を分析し、来店客数を店ごとに分析する手法であるが、気象予報士が活躍できる分野である。具体的な分析例などは興味を引いた。

第10編の「天気情報の報道とキャスター」の中のキャスター現場の声の章では、今日の著名なウェザーキャスターとして、石原良純、岩田忠幸、… アイウエオ順で、最後に森田正光の16名の生の声が写真入で掲載されている。ハンドブックとしてはやや驚きを感じる斬新な企画になっており、編集者のこのハンドブックにかける意気込みが感じられた。頻繁に重版することで、キャスターの顔ぶれに歴史観が出ることであろう。予報士の登場により、キャスターには専門性重視のキャスターと、キャラクター重視のキャスターの二極化が進行した。キャスターをめざしたいと思っている後輩へのメッセージなども記載されていて面白い。好感度で視聴者を引き付ける争いの現場だそうである。

最後に、第11編の「気象知識の普及」では、気象予

報士が普及活動として活躍できるいくつかの企画について記載されている。例えば、気象講演やお天気講座、気象サイエンスカフェの催し方などの具体的な説明がある。このあたりは、気象学会の教育と普及委員会にとっても参考となる記述が多い。

学術的真理の探究を本務とする気象学会と、身近なお天気に関心を寄せる一般市民との間の橋渡し役として、日本気象予報士会は重要な活動母体をなしている。本書はその活動の基礎知識を与える予報士のためのバイブルとなるに違いない。最近、日本気象予報士会は社団法人化を目指していて、日本気象予報士会会長の酒井重典氏をはじめ、理事の方々の溢れんばかりの情熱と高い志には、予報士会の若さと勢いを強く感じる。本書はそんな予報士会の若き情熱の結晶のひとつであり、発展段階の重要でしかも確かなステップとして捉えることができる。これを足場に、日本気象予報士会が今後益々発展することを、日本気象学会の一会員として温かく見守ってゆきたい。

(筑波大学 田中 博)